

# 「文化」の現場を歩く

第6回

人材・施設・手法

静岡文化芸術大学教授  
松本 茂章

## 大阪府豊中市の日本セ ンチュリー交響楽団

### ◆開館記念の特別な夜

こげ茶色の杉材壁に囲まれた豊中市立文化芸術センター（文芸センター）の大ホール（1344席）で、2016年10月10日の夜、こげら落とし記念演奏会が開かれ、同市出身の著名バイオリニスト・神尾真由子と日本センチュリー交響楽団が演奏した。神尾はこの日のためにモスクワから駆け付け、ピンク色のドレス姿で熱演。万雷の拍手を受けてアンコール曲を奏でた。センチュリーの楽団員たち

の大阪万博に先立つ千里ニュータウン造成で新住民が急増。文化的関心の高い方が多く、歴代市長は文化行政に力を入れてきた」と長坂は振り返る。「戦後直後に大阪音楽大学が庄内に移転するなど、



完成した豊中市立文化芸術センター。コンチネンタル・ベージュ色の外観が印象的だ

は首席指揮者・飯森範親のもと、チャイコフスキーのバイオリン協奏曲やドボルザークの交響曲「新世界より」を力一杯披露した。

多くの観客はこの夜が特別な意味を持つ公演であることを承知していた。同楽団が文芸センター、隣接するアクア文化ホール（495席）、同市庄内地区のロイズ文化ホール（336席）、計3館の指定管理者に選定されて本拠地となったからだ。楽団の指定管理者は異例である。他の3社と共同企業体を組み、前年の公募に申請。4者と競い合った結果、1000点満点で702点を獲得し、2位の企業を110点余上回って選ばれた。

文芸センターは2017年1月にグラウンドオープン。地上3階、地下1階の延べ1万3425平方メートルで、小ホール（202席）、展示室、多目的ホールを備えている。美術展なども開催可能だ。阪急宝塚線・曾根駅から徒歩3〜4分歩くと、コンチネンタル・ベージュ色の外観が見えてくる。1968年開館の旧市民会館（1580席（休館））を取り壊して、跡地に整備事業費92億900万円で

市内に音楽資源が多かった」といい、長坂自身、市が2012年度に「音楽あふれるまち」を表明後、市内に事務所を置く同楽団との連携を模索。同年9月には市と楽団の間で推進協定が締結された。こうした取り組みが総合評価され、同市は15年度、府内で初めて文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）に選ばれた。

### ◆危機に見舞われた交響楽団

大阪に四つある交響楽団のうち、大阪府によって1989年に創立されたのが大阪センチュリー交響楽団だ。府文化振興財団が運営し、同市・服部緑地内のオakesトラハウスを事務所兼稽古場とした。しかし2008年2月に知事が交代して事態は急変する。府財政を立て直すため文化施設廃止を含めた財政再建方針が示された。公設楽団の必要性にも疑問が持たれ、年間4億円の補助金を全額カットする廃止論が浮上。存続を求める署名運動も起こった結果、2011年4月、

建てた。

### ◆市民待望の文化施設

曾根駅周辺には旧市民会館、中央公民館に加えて、体育館や野球場もあって文化・スポーツ地区として親しまれてきた。老朽化した市民会館の建て替えが急務だったが、1995年の阪神・淡路大震災に伴う市財政悪化が足かせとなった。市南部の庄内地区で多くの住宅が倒壊し、市は震災住宅を設けるなどの対応に迫られた。文化施設の耐震診断や改修工事が後回しになった。市都市活力部次長・魅力創造課長の長坂吉忠（1964年生まれ）は「1984年に出された文化振興の基本構想で文化総合センターが提言されてから32年……。市制施行80年の今年、ようやく開館できた」と感慨深げにつぶやいた。財政事情の良かった当時、博物館と美術館を建設する案が浮上した。市は1990年に美術品購入基金を設けて8億円を貯めた。しかし財政が厳しくなり、再検討した結果、文化総合センター構想は見送られた。

豊中市は人口約40万人。「1970年

名称変更して公益財団法人日本センチュリー交響楽団に生まれ変わった。音楽家55人、事務局員17人。財団常務理事・楽団長の望月正樹（1967年生まれ）は同楽団ホルン奏者出身で、騒動当時は労働組合である楽員会の代表を引き受けていた。「存続問題を知ってもらいたいと大阪市内の主な商店街に向いて街頭演奏会を開いた。演奏会後にはロビーに出て署名活動をした。必死でした」。15万人分の署名を集めた。

望月が豊中市職員組合の紹介を得て、初めて長坂と会ったのは名称変更直後の2011年6月末のこと。「楽団は府から独立して自由な立場になった。今まで豊中市とご縁がなかったが、一緒に何かできないか」と訴えた。数カ月後、市側から、市内の歴史的建造物などを利用する音楽会「まちなかクラシック」を開きたい……との希望が寄せられた。考えたのは市魅力創造課主査の加藤隆司（1962年生まれ）である。音楽と美術に造

## 市立文化芸術センターの指定管理者に選定

詣が深く、一時は芸術系大学への進学を考えたほど。大阪市立大学法学部の学生時代は大学交響楽団でバイオリンを弾いていた。これまで文化芸術国際課や中央公民館に勤務。11年4月に都市活力創造室が新設された際、室長の長坂とともに赴任した。「センチュリー交響楽団が市内に本拠地を持つことを知る市職員はほとんどいなかった。しかし地元の文化資源を活用しないのは『灯台下暗し』だと思った」。同クラシックは12年度から実施。寺院や教会などの会場借用は難しいこともあったが、粘り強く交渉。下見に

同行した望月は必ず手を打って残響を確かめた。近世古民家では土間を借り、楽団チェロ奏者による独奏を企画。木製の建具や漆喰壁に反響して評判が良く、恒例の会場となつて続いている。

## ◆楽団存続に向けて

楽団の財政難は予断を許さない。2015年度の赤字は2億9000万円。府から自立する際の「持参金」特別事業資産と頂戴した寄付の計22億円を少しずつ切り崩して補ってきた。15年度末の残高

は9億6000万円。このペースで進めば3〜4年で底がつく。だからこそ指定管理者に名乗りをあげた。職員2人を文芸センター勤務に回した人件費節減、音楽会をセンターで開催する会場費削減等で年間3000万円の経費を浮かす目標だ。事務所の賃料が年間3100万円とかさむため、事務所の移転も検討中。さらに音楽会の開催増で増収を図る。

明るい兆しもある。1社100万円の公認支援企業が4社増えて9社になったうえ、新機軸が目白押しなのだ。16年5月にはゴジラ映画を上演しながら生演奏する音楽祭を実施。ドラゴン・クエストのゲームに登場する交響組曲を演奏した同年11月の音楽会ではチケットが完売した。「クラシック愛好家以外の方にも音楽を届けたい」と望月は願う。

楽団は2014年度から地域社会と連携するコミュニティ・プログラム「音楽創作プログラム」の実施に乗り出した。文芸センター開設準備室に派遣された楽団職員の柿塚拓真（1983年生まれ）が担当を引き受ける。これまで哲学カフェオーケストラ、求職中の若者を募つて

JR大阪駅前へ演奏した「The Work」庄内地区住民を舞台にした世界の音楽ワークショップなどに取り組んできた。宮崎市出身の柿塚は相愛大学音楽学部を卒業後、公務員を志して社会保険庁職員になったが、思うところあつて転職。同楽団事務局員に採用された。民間財団の助成を得てロンドン研修に出向き、地域と芸術団体が双方で交流する実践を学んできた。「楽団にどれだけ価値があるのかを地域の人々に分かっていたら、楽団がなくなつてもいいのだから」という機運が高まる。音楽が『理解しないといけないもの』から『楽しいもの』に転じることができれば、楽団に対する印象が違ってくる」と熱っぽく語る。

柿塚は「一度は公立ホールで働いてみたい」と自ら手を挙げて文芸センター勤務を希望した。開館5カ月前の16年5月、奈良から妻とともにセンター徒歩5分に転居。自転車通勤の日々だ。「正直言うと、今まで豊中市に事務所があつても地元と感じたことはなかった。文芸センターに勤務して初めて『自分たちの地域』と感じている」と打ち明けた。（敬称略）